令和５年度　東京都北区立堀船中学校

堀船中だより

令和５年５月　第２号

校長　阿久津　光生
〒114-0004
東京都北区堀船 2-23-20
Tel 03-3911-8817

心身ともに健康にして、国際的視野に立って社会に貢献し、自立した人を育成する。

教育目標　**自ら**学び　**自ら**考え　**自ら**行動できる生徒

《令和５年度 第70回入学式を挙行いたしました》

４月７日、56名の新入生を迎え、第70回入学式を挙行いたしました。阿久津の式辞の一部を掲載いたします。

「～（略）～今日は、そんな堀船中の校歌についてお話しいたします。堀船中の校歌の歌詞には、『近代の大工業地』というフレーズが何度も出てきます。ふと疑問に思った人はいませんか。『大工業地ってどこにあるの？』と。

私も11年前に堀船中に来たばかりの頃は、全く分かりませんでした。しかし、ある歴史研究家の先生と知り合うことができて、その謎が解けました。その方がお書きになられた書物に「堀船は日本経済史の縮図」と記されていて、目が釘付けになりました。

明治から現在まで、時代を象徴する工場が現れ、また次の時代へと姿を変えていった街。それが堀船です。

明治の初め、まず堀船に現れたのはレンガ工場でした。堀船のレンガは、官庁や大工場、鉄道、洋館などに使用され、建築の近代化に貢献しました。しかし、今からちょうど100年前に起きた関東大震災の後は、コンクリート建築が増え、レンガ工場は廃業していきました。堀船４丁目から荒川遊園側に歩くと、当時のレンガ塀が今でも残っています。また、堀船には綿花や羊毛などから糸を紡ぐ紡績工場も造られました。同じく関東大震災が起きた頃、堀船にあった東洋紡という会社の工場では、約 2,300 名もの人が働いていたといいます。しかし、今から約80年前、太平洋戦争が始まると、東洋紡の工場は陸軍に貸し出され、終戦まで陸軍の尾久工場として兵器を生産することになります。この間、堀船の街にも戦争の暗い影が落ちることになりました。戦後になると、東洋紡は、工場をキリンビールに売却します。戦後復興を成し遂げた後、日本人の食生活は豊かになって、日常的にビールを飲むようになったのです。このことから、地域の方々は堀船小学校の前を通る道を「キリン通り」と呼んでいます。

そして現在、キリンビール工場の跡地には、読売新聞と日刊スポーツの工場があります。 最新の機器を備えた新聞工場は、次々に新しい情報を生み出す現代社会のありようを示しているようです。

このように堀船では、明治の「近代化の時代」にレンガや綿糸、昭和の「戦争の時代」に兵器、戦後の「豊かさの時代」にビール、平成の「情報の時代」に新聞と、それぞれの時代の性格を表すような製品が生産されてきたのです。堀船は、日本経済の縮図と言っても過言ではない歴史を持つと同時に、校歌に謳われる「近代の大工業地」の所以も正にここにあるのです。

平成 26 年、堀船中学校創立 60 周年を記念して、地域の方々の寄進により、赤レンガで門を作っていただきました。明治の近代化を支えた堀船のレンガ工場にちなんだ国産のレンガです。このレンガには、当時の在校生一人一人のイニシャルやデザインが彫られています。出来上がったレンガは、生徒も手伝って大切に積み上げていきました。言うなれば、世界に一つだけのレンガ門なのです。

堀船中は、来年度 70 周年を迎えることになります。みなさんも、『近代の大工業地』の意味を知った上で、これから校歌を覚えて、元気に歌ってもらいたいと思います。そして、地域に愛される堀船中の良き校風を先輩達から引き継いで、新たな時代を担っていってくれることを願っています。」

《３組 対面式がおこなわれました》

１年生２名に２、３年生の先輩から歓迎の言葉が贈られました。１年生の２人は礼儀正しくあいさつをしてくれました。２、３年生はとても頼り甲斐があるので、１年生も安心して学校生活を送れると思います。３組のみなさんが大変立派な態度で式に臨んでくれたので、心温まる素敵な対面式となりました。

《JOC「オリンピック教室」を行いました》

４月21日（金）、JOC「オリンピック教室」を２年生対象に行いました。

「オリンピック教室」は、オリンピックムーブメントの普及・啓発活動としてJOCが実施する事業です。オリンピアン（オリンピック出場選手）が先生となり、中学２年生を対象に、自分自身のさまざまな経験を通して「オリンピズム（オリンピック精神）」や「オリンピックバリュー（価値）」の大切さを伝える授業を行います。堀船中に来ていただいた先生は、スキー/ノルディック複合オリンピアンの荻原次晴先生です。

【運動の時間】は、荻原次晴先生と一緒に体育館で体を動かしました。【座学の時間】は、荻原次晴先生が経験してきたことなどの話を聞いて、オリンピックの価値について考えました。２年生にとって大変貴重な体験をすることができました。

津田梅子の生き方（1）
～女性は、生まれたときから差別されていた～

梅子は、佐倉（現・千葉県）藩の藩士であった父・仙と母・初子の次女として、幕末の 1864(元治元)12 月 31 日、江戸の牛込にある、南御徒町と呼ばれていたあたり（現在の東京都新宿区）にあった津田家の屋敷で生まれました。

父・仙と梅子
【提供】津田塾大学津田梅子資料室

梅子が誕生した時、生まれた子が女の子だと知った父・仙は、がっかりして仏頂面で家をとびだして行ってしまったといいます。梅子の父・仙は、当時としては相当に西洋言語と文明に精通した人物で、幕府の外国奉行の通訳として勤めていました。妻、初子の間に初めて生まれたのも女の子でした。名前は琴子といい、梅子が生まれた頃には 2 歳になっていました。江戸時代には、男がその家の財産や仕事を引き継ぐのが当たり前であり、妻となる女性は男の子を産んで初めてその家で認められる、という考えが色濃く残っていました。仙の落胆は、女性の立場がいかに弱かったのかを端的に示しています。すなわち、梅子だけでなく、その頃の女性たちは、みんな生まれた時から差別されていたのです。

生まれて 7 日目、お七夜の祝いを過ぎても、仙は生まれた子どもに名前をつけようともしませんでした。

そんな仙の様子に呆れてしまった妻・初子は、赤ん坊の枕元にある盆栽の梅（むめ）の花が 2 輪・3 輪とほころび始めているのに目をやると、その子を「梅（むめ）」と名づけました（※なお、明治 35（1902)年に梅子（うめこ）と改名）。

父・津田仙は、下総国（現在の千葉県北部と茨城南西部と埼玉県東部など）佐倉藩士を務める小島家の三男として生まれました。アメリカ東インド艦隊の司令官ペリーが黒船を率いて来航したのは、仙が多感な 10 代の頃でした。

このペリー来航が、当時の日本の青少年に与えた影響は計り知れません。藩主の堀田正睦が西洋文明に大変興味を示す人物だったこともあり、仙は、蘭学、英学を学んで通訳となりました。そして徳川御三卿のひとつ「田安徳川家」の家臣の津田家の婿となると、姓が「津田」に変わります。

1866（慶應 2）年 10 月、幕府は購入契約をしていた軍艦の催促、大砲・小銃の輸入、製鉄関係書籍の購入等を目的とした使節団の欧米派遣を決めると、使節団代表・小野友五郎の随員として、仙もこの一員に加わることになりました。堪能な語学を買われてのことでした。梅子が数えで 4 歳になったばかりの慶応 3（1867)年1月、仙はアメリカに旅立ちます。随員の中には、あの福沢諭吉も含まれていました。

そしておよそ半年後、役目を終えて帰国した仙は、アメリカから一冊の本を持ち帰ります。その本は、ヘンリー・ハーツホンというアメリカ人医師が書いた最新の医学書でした。なんと仙は、この難解な本を 4 歳の梅子に見せていました。仙は、梅子の後に跡取り息子ができたことで、生まれた時の冷たい態度が信じられないくらいに梅子を可愛がるようになっていました。